

第344回

日時 2006年3月18日(土) 13:00-17:00

会場 東中野地域センター 洋室:1~2(1階)

東京都中野区東中野4-25-5-101 TEL 03-3364-6677

テキスト 3月のテキスト

長編小説 『幸福の鏡』 芹沢光治良文学館7「幸福の鏡」

第4回(全4回) の予定

司会 豊田

I：最終回。どんでん返しがあっっておもしろかった。昭和13年から話し。人間が幸せになるのはどうすればいいのだろう。普遍的なことを言っていることを感じました。三人の女性が辛を見ていて自分の革命を起こした。本当の幸せは春子だと思った。次郎との文通が良い。二人の文通で高めあった。そういう中で春子が結婚に至る。この結婚に至るまでの状況として春子自身が、次郎も春子も愛という奇跡を信じて体験してことをしている将来の自分の生活の中で奇跡を信じて、将来の幸せに暮らせるだろうという思いがありました。二人がいるが、私としては、直子は自分の理想を求めて言っているのだけど、不幸をもてあそんで楽しんでいる姿が見られる。小川は奇跡を信じてないから、成功するかも知れない。直子自身は、天才的な生き方しかできないと思った。杉方先生の恋愛をここまでとはおもっていなかった。トミ子は現実的な生活で成り上がりたいと思った。働けるのが大事よとかえられる姿がすごいと思いました。藤田、小川、次郎は奇跡を信じる。竹峰さんは彼女を通して

J：腰が痛く本を読めない。痛みを知らない、録画をしていたものをみた。日葉とって日がたたないとなおらない。意地悪キャラをじゃまをする。トミ子みたいに反省している。韓国のドラマと似ている。直子が潔い決断をしているのは珍しいと思った。手紙の分はすばらしいと思った。425ページは奇跡を信じる人と信じない人二種類ある。小川を断ったのは賢明な姿と思った。とことん言っても信じない。直子の力では小川をかえることは出来ない。悲劇というものは自分が強くなってはいけない。精神の自立が大切だと思った。たくさんの親戚の娘を見ると自由な中で育ったのに精神の自立がなくフラフラしている。不幸がある。悲しいものがある。大切という言葉があっって強くなるための大切さがある。直子の言葉として書いてあった。反省して自分を磨く。そのころのトシを考えてきて実際にそういう人がいたと思う。幸福の鏡を持っているということが自立しているということを感じる。幸福の鏡は、お茶の間だった。漠然とした愛の家庭になっている。現実となっているなあと思った。

I：その通りになった？

J：わきわきとしたお茶の間をしていた。私は、幸福の茶の間を予想していたと思った。

T：素敵な良い感想を聞かせていただいた。やはり幸福の鏡という題がとても大気合い見合いがあるのではないか。トミ子や3人の生き方を示されている。藤田存在がショックだった。大きなものだった。姉をトミ子をおめかけにしていた。トミ子まで話しをしていた。表面には優しい人なのになんか裏を返せばとんでもない。一番ショックを受けた。何でもお金で解決できるのがビックリしていた。どんなにチエがあっても裏を返せば、きつかった。やはり、先生が神シリーズの中で書かれていた。今回もそんな場面があった。神を信じることは奇跡を信じることである。

I：藤田にビックリした？最初からミエミエだった。トミ子が家が出るきっかけが何かある。

T：お嬢さん学校で学費を出して見栄を出している部分があった。背伸びをして見栄を張るとというのが以下に愚かなことかということがわかる。トミ子がそこに気がついた。

I：トミ子が気がついたきっかけは

T：藤田ではないか。

T2：トミ子はもう藤田に気をひこうとしていると区があると思う。心変わりの問題で革命を起こした。新聞小説でぼやかした書き方をしている。関係が出来たので、という見方を感じる。

S：しっくりいかないと思っていた。どんでん返しだけど、その晩あったと思う。その点トミ子がこういう考え方になったのか反面えらいと思った。見直した。成長したのはトミ子でしょう。会話文が女性の心理を表している。小説家としての実力。他の作家にない会話文はすごいところだと思う。

T2：トミ子は気持ちを変えたのは翌朝。ドロドロ。

Y：私としてははっきりしない、所詮男というものは、そういう関係しか見ないのか。自立心、駄目になって、最後は自分で働いて働くのが幸福になった。トミ子、起業家として生きていくとおもしろかったのではないか。

N：モデルはどうなのか

O：なったからお姉さんと同じになる。精神的に生きるか

T：藤田との関係はあまり。ドロドロしたのはなぜか。竹峰さんの意見を考えていた。幸福の家を夢見た。そういうトミ子がプライドを満足したのではないか。プライドを満たしているのが結婚ではないか。トミ子は相手に頼る自己実現wがわかる。つかんでくれる人が分かる人は議論で気がつく。自分でつかんで探し出す。保母の仕事がわかる。お姉さんの美容院の営業がすばらしい。

S：信頼していた藤田から非人道的扱いが書いてあるからこそ、我に返って自分の生活を貫こうと思った。トミ子の人間の良さが分からなかった。金で計算されるのが悲しいと思う。自分中心で動くのではなく、誠実なひとだったのではないか。背伸びをしていてトミ子の良さに開花したのではないか。人間性

N：少女小説の一種だと話したけど、筋立てがおもしろい。読者の人が待っていたと思う。P 4 4 4最後に下段の所に気がついたら藤田はかわやかなあと思った。眠っては行けないというもうとまることはしらないようである。蝶のようにまっているという楽しい感じは冷静になってはいない。いいようにされて、気がついた。手っ取り早くトミ子は保母になったのではないか。

I：深い関係ではない。

O：トミ子は2号では上流階級として生きたかった。それに抱かれてしまうというのは根本的には受け入れられないものがある。バックグラウンドが低い。お姉さんが2号さんに成ったのは受け入れられなかった。お姉さんと同じような感覚になったら、負けてしまう。

T：P 4 4 7上段7行目 トミ子は何処にいるのか。この意味は何か。裏切られて議論できるのではないか。春子はすばらしい女性だと思った。直子が小川との結婚を解消する事を決めたのは、忝種類人間がいる。自分は小川に向かないから、杉方先生の思いがあって小川を感じたのか。直子は小説化を望んでいる。いわゆる世の中を成功している人は生活の中に奇跡がない。もう一つのテーマは直子の気持ちを感じ取っていたのか。勘の良いルーズ夫人だから察したのではないか。

I：P 4 4 2人間には忝種類あるから。非常にすばらしい。直子さんの気持ちを通じている。悩んでいるのはこの人とやっていけるのか。この人とは会わない

T：石川さんと逆で、精神的なものを尊ぶ人とそうでない、半々持ち合わせて、バランスを取っている。全く信じる、信じないは分けられない。100%小川が現実者とは思えない。心変わりだから。直子が一番かたくなな正確ではないか。これだと結婚はむりではないか。

N：P 4 4 7 トミ子は慶応病院での玄関。運転者に紙幣を握らせているのは藤田と一緒にではない。それを知ってもらい為、藤田のあの晩で居所不明

I：藤田の匂いを感じた。一番幸せは、気が通じる人と一緒にいられる人といいたい。奇跡を信じる人。ルイーズ夫人がいるから杉方先生にいる。仮祝言をする時でも

N：直子との考え方はエリートでしょう。大臣の奥さんになる。自立して願望がふくらんでいた。トミ子は結婚願望、ある子は純粋な女性像、直子は小説家に成って自立したい。

O：奇跡はどういう事をいつているか。二人に出会いでは奇跡をどういう事を意味しているか。二人で何か築こうとしているもの。春子と次郎は何かを築こうと思っている。両方が練り会える。

T：精神的な問題にウエイトを置く生き方。

4月26日神シリーズ 4月10日解釈と鑑賞

Y：奇跡は精神性ではないか。身の上相談とかやります。延長戦では、宗教性。

T：奇跡は神だ。神を信じる人。奇跡はまか不思議なものがある。

I：直子が愛しては行けない杉方をルイーズ夫人を愛そうとした。杉方が戦場に行くから守ろうとする。感覚は、不思議なものだと思う。心の葛藤を表そうとしている。

T：主人の発表のためにあなたに近づくために恋人の友だちになる。杉方のそばにいたいところがある。奥さんに近いところに行くところがある。

O：却って本人が向こうに行っているのを助けてあげているのがあの人に尽くしている気がする。充分出来る。相手があって出来る感情。直子に対してどんな感情を持っているか。直ぐもろく壊れそうだけど、そう簡単には壊れないのではないか。杉方さん

Y：離れているからこそこういう二人になって助けていける。お手紙をくれたから愛していると書いている。一時噂になった。嫌いではないけど夫人と別れたのではないだろうか。

I：杉方からの手紙が来る。ルイーズ夫人をさしおいて直子に連絡を取っているのは思いを寄せている。自分がどう生きていくか、直子を思い出すというのは愛の告白かなと思う。そういう片思いだったら、ルイーズ夫人も保護する。先生の方をつくす。男にして難しい。

T：直子は片思いであって、生徒としての関係。あえて小説家志望で教えをこいたい。この手紙では良い天分を伸ばせてあげたいと書いている。杉方夫人はどうだろうか。

I：杉方先生が手紙を書いたのではないか。それ以上のことは全くない。芹沢先生は、書くことによって奇跡を表現しているのではないか。精神的な面で奇跡を共有出来ない気持ちと杉方先生を

O：男子が遠くにいるというのが二人いるということから。別に好きな人ではないのではないか。ヨーロッパの人と結婚の絆は想像以上に強いと思った。日本女性のヨーロッパの女性のかえることができないこと。うわさ

I：直子はどうなっていくか。

たむら：P 4 6 5 送別会の話。直子の生き方。

I：不幸をもてあそんでたのしんでいるのではないか。そういう幸せが薄い生き方ではないか。自分の信念は自分を磨いて行く他はない。

O：戦前に女学校を出た人は自分の意見を持ってすばらしい。そういう女性（パーマネントに和服）それぞれの性格に従って生きていく。はっきりした意見を持っている。すばらしいと思う。それなりに自分なりのはっきりした。

I：春子は沼津の風景。富士山の反対側、池があるのだけでも、二人だけの結婚式を良く書くとした。春子が一番三人の中で幸せだと思った。愛という奇跡を生み出す。思い描いた通りの二人だと感じた。ほんとの愛の奇跡をみた。二人の生活は本当に幸せだと思う。

T：三人の中ではいいこすぎて意見を出せない。こういう人間はいない。正しい人間はいないのではないか。「冬の旅」の主人公は、自分が正しいからといって自分を押しつけてくる。攻撃してくる。こういう風にして中国に行ったら人間関係とかうまく表す。

T：解題に方のところ。自分の中に作者の構成 罍

K：トミ子が会いたくなくて情動的なものに知った人戦争に対する気持ちがあるのだけれどもルイーゼ夫人はカトリックだけど、靖国に行くのは戦争で闘っている。お祈りするのは日本人だと思う。みんな靖国神社子ども達みんながお祈りを捧げたころはない。命をかけて敬虔な祈りをする。カトリックの神は遠ざかっていったのではないか、カトリックの神を否定する。サムライ末裔は先生自身がカトリックの神を捨てる。神の意志ではない。カトリックの神を否定する。大陸に行って死ぬので心情は日本人としての愛国心としてよく分かるだけに参ってそれをずっと心情を引っ張りながら思いをあらわしているのではないか。

R：小説の文章で書きたくなかったのがある。芹沢光治良が書きたくなかったのではないか。

N :

K : 日本の戦争に対して

出典を確認する。ローマ法王沈黙を守り通した。ユダヤ人側がイスラエルの女性首相が尋ねる